

韓統連大阪通信紙

自主

チャジュ

322号

2017年12月号

자주

発行 在日韓国民主統一連合
(韓統連) 大阪本部

〒544-0034

大阪市生野区桃谷3-13-6

TEL06-6711-6377 FAX06-6711-6378

毎月1日発行 購読料 年間3000円

郵便振替 00940-7-314392

民族時報社 大阪支社

トランプ訪韓が残したもの

トランプ米大統領が11月7日、韓国を訪問した。晩餐会では、元慰安婦のハルモニ（お婆さん）が招待され話題になったが、翌日の国会演説では北朝鮮の核ではなく、北朝鮮そのものを全否定する持論をぶちまけた。「“最大の圧迫”によって北朝鮮を屈服させて、対話の場に引きずり出す」という論理は、すでに失敗した「北朝鮮崩壊論」と同じ発想だ。過去に南北首脳会談を2回実現した、平和と統一を求める分断民族への配慮は微塵もなかった。慌ただしく中国へ発った後にトランプが残していったものは、莫大な金額の米国製武器の請求書だった。

●大国の武器商人

韓国でのトランプ大統領は、指導者というよりも武器商人だった。首脳会談後の主なメッセージも「韓国が数十億ドルの軍事装備を注文すると約束した」「韓国側が米国の多くの兵器を購入したことについて感謝する」だった。米国政府は最近、F-35戦闘機などの先端武器を売る時「対外有償軍事援助」という方式を適用している。米国政府が軍需企業の代わりに相手国の政府と直接取引し、武器の価格は米国政府が決めるが、納期は延期できるが、代金の支払いは事前にしなければならないという方式だ。日本がこの方式で導入した米国製武器は、2011年には589億円だったが、来年は4804億円になり8倍に増加している。

納期が保障されない高価な武器を言い値で前金で購入して、一体どんな防衛をするのだろうか。

韓国の保守勢力は、日本は2泊3日なのに、なぜ韓国は1泊2日なのか、韓米同盟が揺らぐのではないかと、(十分に親米的ではない)文在寅大統領

が安倍首相に先を越されて「 코리아・パッシング(韓国排除)」を受けていると批判を高めた。

今回のトランプの訪韓で韓国国民はどれだけの安心感を得たのだろうか。トランプはこれからも韓米同盟の見返りを求めてくるだろう。何のための、誰のための韓米同盟なのか。大国の武器商人に、もうこれ以上振り回されてはならない。

●平和のために

文在寅大統領がトランプを迎えたのは平澤(ピョンテク)米軍基地だった。ソウル龍山(ヨンサン)基地から拠点を移すために、大幅に拡張整備して6月から稼働した米陸軍の海外最大の基地だ。総経費107億ドルのなんと92%を韓国が負担している。北朝鮮の4倍の軍事費を計上しながら自主防衛ができず、米国に基地を提供し、さらに米国の



▲NOトランプ、NO戦争と訴える韓国民衆

武器を大量に買い続けなければ維持できない韓国の安保政策とは何なのか。

米国や日本と違い、韓国はたとえ冗談でも戦争を口にするのも、想像することもできないはずだ。外国の仲介や特使を期待するのではなく、韓国自らが当事国として、今こそ朝鮮半島の平和のために、制裁ではなく平和的方法(対話と交渉)による解決を力強く訴えていかなければならない。

平昌オリンピックの成功のためには、例年実施されている韓米合同軍事演習は当然中止されるべきだ。北への人道支援も即実施するべきだ。実施の時期が「南北関係の状況」に左右されるなら、それは人道的支援ではなく政治的支援だ。

南と北、われわれは絶対に互いに戦ってはならない同胞だ。(隆)

トランプの訪日・訪韓反対を訴え、 キャンドルデモ、街頭宣伝活動を行う トランプ大統領訪日・訪韓反対行動

トランプ米国大統領の訪日・訪韓（11月5日～7日）に反対し、対北朝鮮敵視政策の転換を要求する行動が東京と大阪で行われた。

東京では、韓統連と日韓民衆連帯全国ネットワークが11月3日（金）、東京都内の駐日米国大使館前で抗議行動を行うとともに、4日（土）には新宿で、同団体の共催による「戦争準備のための訪韓・訪日反対—トランプNO！侵略戦争NO！」を訴えるキャンドルデモが行われ、道行く人々に「トランプ訪日・訪韓反対」などを訴えた。



▲トランプ訪韓反対を訴える街頭宣伝活動

6日（月）には韓統連大阪本部、韓青大阪府本部のメンバーが、JR鶴橋駅前街頭宣伝活動を行った。街頭宣伝活動では、参加者がビラを配布するとともに、「朝鮮半島の緊張を高めるトランプ訪韓反対」「米国政府は無条件で北朝鮮と対話しろ」などと書かれたプラカードとキャンドルを持ち、道行く人にアピールするとともに、一人一人交代でハンドマイクを通じて、トランプ訪韓の問題性などについて訴えた。

統一運動における理論と歴史を学ぶ

第2回祖国統一学習会

統一運動を行っていくための理論と歴史を学ぶ「第2回祖国統一学習会」が11月23日（木・祝日）小田地区会館（尼崎市）で、宋世一（ソン・セイル）韓統連中央本部副議長を招いて開かれた。

学習会では、宋副議長が講演を通じ「誰が、どのような国家を、どのようにして建設するのが明確に整理・提示されなければ、統一運動を全民

族的に強力に推進することはできないし、統一を成し遂げることはできない」と述べながら、「その点で6・15共同宣言は、わが民族共通の統一の里程標の位置を占め、その精神はわが民族同士という言葉に集約される」と指摘した。



▲統一運動の歴史などについて講演する宋世一副議長次に、6・15共同宣言発表以降の歴史について触れながら、「2005年に初の民間による合法的な常設統一運動機構として6・15民族共同委員会が結成された」と語り、結成以降の統一運動の歴史について報告された。講演後は質疑討論が行われ、学習会は終了した。

裴東湖先生と「愛国論」に密着した一日 韓統連生野支部 人物に見るウリ歴史

韓統連生野支部主催による「人物に見るウリ歴史」シリーズの最終回（第7回）が11月12日（日）、生野支部事務所（大阪市生野区）で開かれた。

今回のテーマは「裴東湖（ペ・ドンホ）～“愛国論”に込められた生きざまと精神～」と名打ち、文字通り、韓統連運動の指導者であった故裴東湖先生と、その著書「愛国論（2013年刊第4版完訳版）」について学んだ。

講師は金隆司（キム・ユンソ）韓統連大阪本部代表委員。レジュメとともにパワーポイントを駆使し、1時間半という限られた時間にもかかわらず、裴東湖先生の業績と愛国論の内容がこれ以上ないほど整理され、紹介された充実した時間となった。

報告ではまず、裴先生が民団草創期（1946年10月）から、一貫して自主的で民族的矜持に満ちた祖国と同胞社会の建設のため献身され、そ

の闘いの発展として、今日の韓統連運動があることが報告された。



▲愛国論の内容などについて金隆司代表

続いて「愛国論」については本の順を追ってその内容が紹介されたが、それぞれの単元の要点がパワーポイントを用いて簡潔にまとめられる一方、「愛国」「疆土」「民衆」「自主」など、本書を理解する上で重要な言葉の語彙と、そこに込められた著者の意志が講師の言葉を通じて紹介されるなど、参加者が理解する上で助けとなる配慮がな

された。

今回の学習会には同胞の仲間たちのみならず、闘いの一線を共にする日本の友人たちも参加した。報告後の懇談の場では、その友人たちから「今の日本(人)にとっても通ずる貴重な話だった」との感銘が述べられ、同胞の参加者からは「読むのに苦勞し、難しい内容だと思っていたが、話を聞いて身近に思え、貴重な中身が伝わってきて本当に良い学習会だった」という感想が返ってきたように、韓統連運動の長年の実践者である講師の読解の深さと入念な準備が参加者の共感を生み出したと言えよう。

(追伸) この報告原稿の担当者の私言であるが、講師から本書の「あとがき」と、その担当者の郭元基(カ・ウォンギ)韓統連中央本部副議長(去る10月に逝去)の名が紹介された時、とりわけ胸が熱くなった。「愛国論」は裴先生の名著であると同時に、今を生きる者が実践を通じて血肉とすべきという思いを強くした(金昌範)。

＜次代を担う若者たち＞ －韓青大阪本部 活動紹介－

アンニョンハシムニカ、韓青大阪本部の李俊一(イ・チュンイル)です。早いもので、もう2017年も終わりに近づいてきましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか？

韓青では、この間も精力的に活動してきました。11月8日には生野北支部、布施支部でそれぞれ秋期ウリマル(韓国語)開講式を開催しました。今回の開講式には新しい同胞青年も参加してもらうことができ、フレッシュな気持ちで楽しい開講式にすることができました。韓国の青年たちとの交流が本格化してくる中、ウリマル学習の重要性は高まっています。今回のウリマル開講式を契機に韓青大阪本部全体として、さらにウリマル学習に熱を入れていきたいと思えます。

また11月25～26日には、貝塚市の研修施設で「韓青全国幹部研修会」が開催され、全国から常任委員が集まり、熱誠的に研修と討論を行いました。研修では、これまでの内容とは一味違ったテーマとして「リーダーシップ」や「マネジメント」などを点検するグループワークや、自主・民主・統一について改めて自分たちで考える発題企画など、より実践的な内容で行われ、班別討論も白熱しました。

今年ももうすぐ終わりです。すぐ冬期講習会がやってきます。今回はなんと地元大阪での開催(3月3日～4日)となりました。より参加しやすい形での講習会となりますので、皆様のお知り合いで同胞青年がいましたら、ぜひ韓青大阪本部までご連絡ください。よろしくお祈りします。



▲ウリマル開講式での記念写真

【投稿】 革命を支えた市民メディアの勝利

●韓国の革命は現在進行中！

今、韓国は激動の中にあります。前政権、前々政権の不正が次々に明るみに出ているからです。そうです。パンドラの箱はあけられたのです。箱から飛び出すのは、この9年間に積み重なった、ありとあらゆる不正と腐敗と悪の数々です。韓国ドラマをはるかに超える「悪いやつら」の悪行には怒りとともに、ため息すら出るほどです。

李明博と朴槿恵の9年間は、徹底した言論弾圧と政権に批判的な人物の社会的な抹殺でした。

●ポッドキャストの威力

そんなすさまじい言論弾圧の中でも、2016年のような「촛불혁명（キャンドル革命）」が起きたのは、「ポッドキャスト」という新しい市民のメディアがあったからです。人々が真実を知り、声を上げることができたのは、すべてこの「ポッドキャスト」のおかげだったと言っても過言ではありません。

「ポッドキャスト」というのはインターネットラジオのことです。メジャーの言論やテレビのニュースが政権の御用放送になり、本当のことを放送しないのに嫌気がさした市民たちは、この「ポッドキャスト」を通して真実に接近することができたのです。

●元祖は「나꼼수（ナコムス）」

韓国の「ポッドキャスト」の元祖といえるのが、2011年4月から2012年12月にかけて放送され、韓国で熱狂的な支持を呼んだ「나는꼼수다（私はせこいやつだ）」です。

この番組からは数々の真実が暴露され、当時の政権にとっては脅威となっていました。この「나꼼수」がきっかけとなって、韓国ではその後、たくさんの「ポッドキャスト」が生まれることとなります。

●韓国政治の最新情報がリアルタイムで

人気のある番組だと一回の放送のダウンロード数が500万回を超えるほど大きな影響力を持っています。「ポッドキャスト（韓国語では、팟캐스트といいます）」を聞くと、韓国に関する

情報を、どのメディアよりも早く手に入れることができます。日本でもスマートフォンやパソコンで聞くことができます。視聴方法はカンタンで、アプリで「팟빵（パッパン）」をダウンロードして、その中から好きな番組を選んで聴くだけです。

●おすすめのポッドキャスト3つ

特におすすめの番組は、①김어준의 뉴스공장（キム・オジュンのニュース工場）②김용민 프리핑（キム・ヨンミン ブリーフィング）③새가 날아든다（鳥が飛ぶ）この3つです。①と②は、どちらも元「나꼼수」のメンバーなので、

とにかくおもしろいです。②は、モノマネの得意なキム・ヨンミンが、朴槿恵や安哲秀の声帯模写をするコーナーもあり、いつも吹き出しそうになります。ただ、韓国語の難易度は韓国ドラマよりずっと高いです。それは日常で使われる生の韓国語だからです。それだけ勉強になるということですね。



▲キム・オジュンのニュース工場

●革命はゆっくり進む

早急な失望は禁物

文在寅大統領は、9年間の腐敗の清算という重い課題を背負って改革の舵取りに乗り出しました。櫓（ろ）をこぐ時に、早く漕いだからといって、遠くに行けるものではありません。ゆっくり、大きく漕ぐことを繰り返すことにより、はるか遠くに進むことができるのです。

革命はその後が一番重要です。一度で成功する革命はありません。革命の完遂までの道は限りなくわしく、そして、闘いはまだ始まったばかりです。すぐ目に見える変化がないからと失望するのは早すぎます。早すぎる失望は、敵の復活に手を貸す危険な行為です。

●パンドラの箱のゆくえー 最後に残るのは「希望」

ギリシャ神話では、パンドラの箱をあけると、ありとあらゆる人類の災厄と悪が飛び出します。そして、その後には「希望」だけが残りました。

奇蹟はそれ自体としては誰にも見えない。

ただ信ずる者にのみ、それは見えるのである。

—ジジェク

(ヘス)

【翻訳資料】 木浦新港を離れるセウォル号惨事行方不明者家族

●「5人のことを忘れないでくれ」と嗚咽

セウォル号惨事から1311日を迎えた11月16日、捜索作業が終わりゆく中、愛する家族を収拾できないまま木浦新港を離れることを決めた行方不明者の家族は、据え置かれたセウォル号の前で記者会見を行い「最後まで行方不明者として残った5人を永遠に忘れずに、覚えていてほしい」と嗚咽した。

惨事で行方不明となったナム・ヒョンチョル君、パク・ヨンイン君、ヤン・スンジン先生、クオン・ジェグンさんとヒョッキュくん父子の家族が木浦新港を離れる前、引き裂かれ、錆びまみれの凄惨な姿で横たわるセウォル号の前で会見を行い、国民に向かって最後の挨拶をした。

「この間、あまりにも会いたくて、諦められなかったが、今はもう家族を胸に刻むことにした」。

家族を代表して、ナム・ヒョンチョル君の父であるナム・ギョンウォン氏が震える声で記者会見文を読む間、他の家族は頭を垂れて涙を流したり、手で涙を拭った。

彼らは「セウォル号が引き揚げられて、ここ木浦新港に置かれた後、私たち家族は、これで家族の遺体を見つけられるという希望のもと、埠頭内に用意された小さいコンテナで生活し、毎朝セウォル号を眺めた」と述べ、「この間、2014年の珍島でのように、遺体を見つけて離れていく家族を羨み、残っている家族同士お互いを慰め苦痛の日々を忍んできたが、毎日、毎日捜索が終わるたびに、私たちも家族を見つけて離れられるという希望より、永遠に家族を見つけれないかもしれないという恐怖と苦痛が、ますます大きくなっていった」と木浦新港を離れることを決めた心境を打ち明けた。

そして「家族とあまりにも会いたくて、諦めることができなかった」と語る時は、声までぶるぶ

ると震え「セウォル号の船体捜索が終わりつつある今、私たち家族は悲しく辛い、今やもう家族を胸に刻むと決断を下した」と明らかにした。

●文在寅政権に再発防止を訴える

「第2期特別調査委員会が構成され、真相究明が必ずなされなければならない」「5人を永遠に忘れずに覚えていてほしい」。

家族は特に「数多くの葛藤の中、これ以上の捜索は無理な要求であり、私たちを支持して下さる国民に、これ以上負担をかけてはいけないという結論を下した」と述べるとともに「私たちは離れるが、以後、船体調査過程でも遺体が見つかり、家族のもとに送り返して下さることを願い、これからは全て政府と船体調査委員会に託します」と涙声で話した。

さらに政府に対して

「大韓民国でセウォル号惨事のようなことが繰り返されてはならず、セウォル号惨事を教訓として、どんな事故が起きても即刻に対応できる完璧なシステムを構築しなければならない」とし、「第2期特別調査委員会が構成され、一点の疑惑すらない真相究明が必ずなされなければならない」と訴えた。

国民に対しては「共に泣き、痛みを共にして下さり、一生返すことのできない大きな愛を受けた」と述べ、地元住民、漁民、潜水士、政府関係者たち、船体調査委、メディア、4・16家族協議会、安山市及び木浦市民にそれぞれ語りかけて感謝を伝え「これからは私たち家族とともに、セウォル号に対する痛みを少しでも和らげてくだされば幸いです」と語り、最後に行方不明者5人の名前を一人一人叫び「この5人を永遠に忘れずに覚えていてほしい」と繰り返し、頭を下げた挨拶をした。しかし、名前を一人一人呼ぶ間、それまで喉から漏れなかった嗚咽が溢れ、国民に向かって挨拶した後、床に座り込んで泣き叫んだ。



▲セウォル号の前で会見を行う行方不明者の家族

